

「イエスのみ顔」

松永 敦神父

昨年、いつくしみの特別聖年開幕にあたって、教皇フランシスコは大勅書『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔』を公布されました。イエスがいつくしみ深い父である神のみ顔だと言っているわけですが、この大勅書の中で教皇は次のようにも述べておられます。

「イエスとそのいつくしみのみ顔にまなざしを向けると、わたしたちは三位一体の神の愛をつかむことができます」(8)。

「教会は自らの第一の使命が、大きな希望と大きな矛盾に満ちたこの時代にこそ、キリストのみ顔を観想することで、神のいつくしみの偉大な神秘にだれもが入れるようにすることだと知っています」(25)。

大勅書には「顔」という言葉が7回使われていて、そのうちのこの2か所は目を向け、観想するように促されているのは父なる神のみ顔ではなく、イエスのみ顔、キリストのみ顔です。このふたつの箇所気付いた時から、私はイエスのみ顔について黙想するようになりました。

イエスのみ顔が描かれた図像は無数にありますが、実際のイエスの肖像画というのはありません。なので、描かれたイエスのみ顔は、それを描く者のうちにあらわれたイエスご自身のみ顔であるとともに、その人の信仰を通して映し出されたイエスのみ顔です。たとえば、カタコンベに描かれたよき牧者のような青年の顔もあれば、髭をたくわえ、風格のある王の顔もあります。他にも母マリアに抱かれた巻き毛の幼子の顔や、十字架上で苦悶の表情を浮かべる顔もあります。それぞれは時代背景や描いた人の信仰が反映されたものですが、ただひとりのイエスのみ顔を描いたものです。皆様はイエスのみ顔と聞いて、どんな表情、まなざし、言葉、声を思い浮かべるでしょうか。あるいはどの聖書箇所や画家の作品を思い出すでしょうか。

図像に限らず、み顔は具体的な現実の中でも示されることがあります。6月13日、ローマの国連世界食糧計画(WFP)本部を訪れた際に教皇は次のように語っておられます。

「貧困には顔があります。子どもの顔、家族の顔、若い人と高齢者の顔があります。可能性と仕事の機会がない多くの人々の顔があります。強制的に移住させられ、家を失ったか破壊された人々の顔があります」。

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ 25・40) というイエスの言葉にあるように、貧困にあえぐ人々の顔のうちにもキリストのみ顔が示されます。こう書いていて、神学生になる前に山谷へおにぎり配りに行ったことを思い出しました。花壇の縁に腰を掛け、どこか遠いところを見つめるおじさん。どうぞと言って、おにぎりを渡したら、ありがとうと返事が返ってきただけの会話なのに、なぜか私にはその方がキリストに見えたことがありました。いつくしみのみ顔を示すというのは相手のうちにキリストのみ顔を見つけることなのだと思います。そうすることで、相手も私のうちにキリストのみ顔を見つけ、互いが互いのうちにキリストのみ顔を見ることがなるのだと思います。